

国立民族学博物館の収蔵品 ⑤3

# 東南アジアの棒ツィター



写真1 カンボジアのクサエ・ムアイ  
(国立民族学博物館蔵、標本番号H0217184)

八世紀末から九世紀初めにかけてシャイレンドラ王朝によって建設された仏教遺跡ポロブドゥールや十二世紀末から十三世紀初めにかけて造営されたアンコール帝国の都城アンコール・トムには、当時の文物を彷彿とさせる浮彫が施されている。そこにはたくさんの楽器も描かれている。その一つが棒ツィターである。棒ツィターは研究者がつけた楽器分類上の名称で、棒のような胴に弦を張った楽器を指す。同種の楽器は、現在のジャワ島には伝えられていないが、カンボジアとタイでは、今も演奏されている。

この楽器の名称は、その特徴や歴史をよくあらわしている。カンボジアでは、クサエ・ムアイあるいはセ・ディウとよばれている。どちらにも「一本の弦」を意味し、それらが一弦の楽器であることをあらわしている。フレットはなく、左手の指で弦を押さえて音程を変化させ、

右手の薬指に爪をつけて弦をはじく。弦をはじく瞬間に、弦に軽く触れていた右手の人差し指の付け根のあたりをはなすことで、倍音（ハーモニクス）を発生し、そのかすかな音を楽しむ。

タイではこのタイプの楽器をピン・ナムタオとよんでいる。ナムタオはヒョウタンを意味している。半分は切ったヒョウタンが取り付けられているところからこの名がつけられたのだろう。現在タイではヒョウタンではなくココナツの殻を使うことも多い。ヒョウタンは共鳴器の役割を果たすが、演奏時、奏者はこのヒョウタンを胸にあて、開口部を閉じたり開けたりすることで音に変化をつける。ちなみに、タイにはピン・ピアとよばれる同種の楽器があるが、こちらは二本から四本の弦をもつ。また、ピンという名称は、インドのヴィーナーに由来する。この楽器の起源はよくわからないが、インド文明の大きな影響の下で成立した東南アジアの諸王朝の遺跡にこの楽器が描かれていることから、インドとの密接な関連をもっていることがわかる。インドのオリッサやジャールカンドには同種の楽器が伝わっている。

カンボジアのクサエ・ムアイは、古いタイプの結婚式の音楽プレーン・カー・ボラーンに用いられてきた。かつては一週間も続いたといい、現在でも二日間ほどは続く結婚式では、様々な儀式がとりおこなわれる。それぞれに決まった歌があり、それらの伴奏に用いられる。また、プレーン・アラックとよばれる憑依儀礼の伴奏にも用いられたという。おもしろいことに、ピン・ピアも求愛の行為と結びつけられてきた。北タイでは、五〇年ほど前まで、実際にこの楽器を奏でて求婚する人がいたそうだ。ハーモニクスを使った独特の心に染み入るような音が、精霊にはたらきかけたり、恋心をかきたてたりするのかもしれない。

(福岡正太)